



2002年12月から4ヶ月弱、ロンドンの自然史博物館で研究を行う機会を得ました。この博物館は大英博物館の一部として1756年に開館し、1880年に自然史部門が現在のサウス・ケンジントンに引っ越し、1963年に自然史博物館(The Natural History Museum)として独立しました。訪れてみて感じた琵琶湖博物館との一番の違いは、歴史の重みです。自然史博物館の研究者に言わせると、「ガラスは液体」だそうです。200年以上経過すると、ガラスの標本ピンは下に垂れ

下がり、上部が薄くなり、下部の厚みが増し、割れやすくなるそうです。

液浸標本のラベルは今でも羊皮紙(ヤギ皮を薄くなめたもの)を使っています。第2次世界大戦後一時、紙のラベルを使ったこともあるそうですが、紙は50年も経過すると劣化してしまいました。それに対し、開館当時の羊皮紙のラベルは200年以上経過してもまったく劣化は見られないそうです。そこで現在では、ラベル用に羊皮紙を特別注文しているそうです。

開館後7年にも満たない琵琶湖博物館では想像もつかないことがいろいろありました。今後、琵琶湖博物館でも200年後のことを考え、日本伝統の手すき和紙に墨のラベルを検討する必要があるのかもしれない。



自然史博物館ダーウィンセンターの液浸収蔵庫(写真掲載は自然史博物館の好意による)



私は琵琶湖博物館で、地学資料の整理、岩石や鉱物の標本のデータ整理、化石のクリーニングなどをしています。こう自己紹介をすると「さぞかし専門の勉強をしてきて」という反応をされることが多いのですが、まったくそんなことはなく、大学で学んでいたのは美術でした。卒業した当時は小さな工房で化石や文化財(埴輪や土器など)のレプリカを作る仕事をしていたのですが、そのうち化石のスケッチをする仕事でこの博

物館に通うようになり、化石の本の挿絵(博物館うらおもて)や鉱物・化石展のポスターも描かせていただきました。それから後に化石のクリーニングを1年半修行(?)し、現在の資料整理になってからも2年目となり化石採集にも行くようになりました。美術をやっていたはずが地学に「われながら不思議です。それからもうわ、てな感じですが、まだまだ地学の専門知識は浅く、勉強中の日々です。」

交流ノート

琵琶湖博物館ミュージアムショップのコンセプトは「来館者の知性と知識を刺激する」です。ショップでの来館者と店員さんとの交流をのぞいてみました。

ここのミュージアムショップの特色は何ですか?

何と言っても淡水魚関係のグッズが豊富なことです。お客様の中には、それだけを目的に何回も足を運んでくださる方もいらっしゃるほどです。水族展示を見たあとで「あそこにいる魚のグッズが欲しい」という方も多いです。

先日も最近生まれたお友達



人気のナマズぬいぐるみ



インテリアにも使える鉱石

の赤ちゃんがナマズに似ているので、「ナマズぬいぐるみ」が欲しいというお客様がおられ、想像しただけで微笑ましくなりました。

オープンからまもなく7年になりますが、来館者の方々の変化を感じられますか?

世の流行を反映しているのがよく分かります。今は、やはり鉱物、化石がブームのよ

うですね。女性の方がインテリアとして高価な鉱物を買って帰られることもあります。それにショップのみを目的に来館されるお客様が増えています。リピーターのお求めになるのは鉱石、化石、書籍などの専門性ある物です。私たちもそうしたお客様のご要望に応えられるよう、日々勉強しなければと思っています。

来館者の方々との交流の楽しみは何ですか?

以前来られたときにお買いあげいただいたペンダントやブローチなどを身につけて来

られたときです。そういったお客様とは博物館グッズ談話のようなこともできて、他の博物館のグッズ情報も教えていただくこともあります。こうした情報がオリジナルグッズ開発のヒントになるのです。



オリジナルペンダントが創れる

琵琶湖博物館ミュージアムショップのグッズについては下記でご覧いただけます。

URL <http://www.from.co.jp/oydeya/>